

我が国で開発され、備蓄されている細胞培養痘そうワクチンの有効性、安全性、生産性向上
および国内外のバイオテロ対策のあり方に関する研究

分担報告書

バイオテロ対応ホームページのアップデートとバイオテロ対策支援方法の開発

所属 東京大学医科学研究所附属病院
感染免疫内科・助教

研究分担者 安達 英輔

研究要旨:2019年度は髄膜炎菌髄膜炎について、新規の項目を設定したまた、治療が困難で世界的な流行が懸念されている。多剤耐性結核菌について全面的な改定を行ったその他、デング熱など、輸入感染症として、日常的に遭遇しうる疾患についても適宜改定している2020年1月に大幅なレイアウト変更を行った。

研究協力者

池内和彦 東京大学医科学研究所 大学院生
猪狩英俊 千葉大学医学部附属病院 診療教授

定している。2020年1月に大幅なレイアウト変更を行った。これらの結果、前年度から大幅なアクセス数の増加があった。

A. 研究目的

昨今の国際情勢を鑑みるとテロリズムへの懸念は弱まることはなく、生物製剤を用いたバイオテロに対しても十分な対応が必要である。特に2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控えた日本では対策強化が不可欠であり、すでに延期が決まっているため、今後も継続していかなくてはならない。本研究では、バイオテロ対応ホームページを通じて、使用される可能性のある病原体の特徴や発生時の応急対応などを広く情報提供し、有事の際の混乱を最小限に留めること目的とするさらに、ホームページ以外の方法でも効果的な支援方法を検討する。

B. 研究方法

バイオテロ対応ホームページ作成担当者と相談して、改訂作業を行った。

【倫理面への配慮】

公表された情報のみを研究材料とするため、倫理面への特別な配慮は必要ない。

C. 研究結果

今年度は髄膜炎菌髄膜炎について、新規の項目を設定した多剤耐性結核菌について全面的な改定を行う他、その他、デング熱など、輸入感染症として、日常的に遭遇しうる疾患についても適宜改

D. 考察

ホームページ更新のアクセス数については昨年度よりさらに増加した。これは COVID-19 の発生以前の2019年4月-12月でも認められた(図)。また、2020年からは COVID-19 の影響からか、更にアクセス数の増加が認められた。

E. 結論

2019年ホームページアクセス数は増加傾向にあり、情報提供源として一定の役割を果たしていることが確認できた。バイオテロへの認識向上に効果的である可能性が示唆された。COVID-19の流行から SARS など過去のコロナウイルス感染症への情報提供も求められていることなどが伺われた。延期が決定されたが、2021年には東京オリンピックが開催されるなどバイオテロ対策の重要性は今後も増大していくことが予想される。バイオテロに使用されうる病原体や各疾患の特徴などを閲覧できるホームページの継続的な改訂は今後とも継続していく必要がある。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表
該当なし

2. 学会発表

- 1) 池内和彦, 安達英輔, 林阿英, 古賀道子, 堤武也, 四柳宏. 初診時の迅速検査が陰性, 抗核抗体が320倍であったチクングニア熱の一例. 第68回日本感染症学会東日本学術集会, 仙台(2019.10)

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし

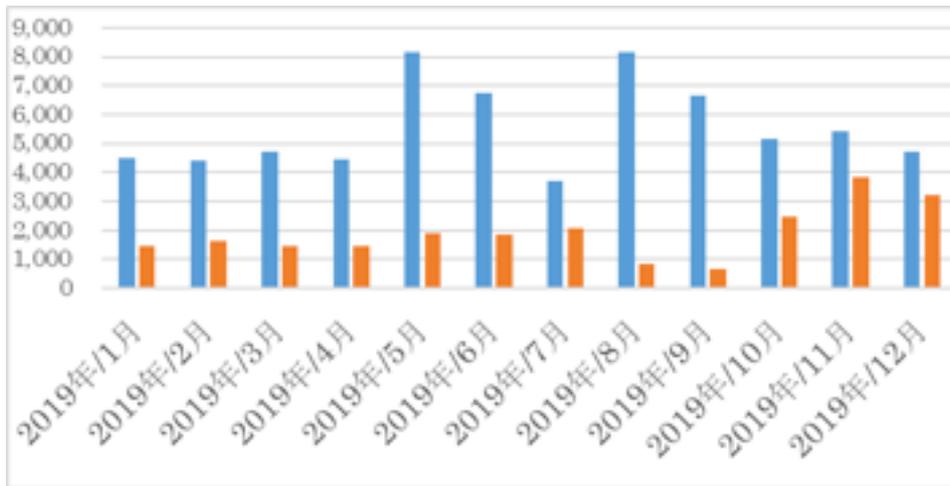


図 2019年ホームページアクセス数